

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	紺野 達也
論文題目	王維『輞川集』の研究
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、盛唐の詩人、王維の代表作とされる『輞川集』について、その表現のありようと評価の確立に至るまでの経緯、及びその文学史上の意義について考察したものである。王維の詩名は生前からすでに高く、没後まもなく代宗によって「天下の文宗」と称せられたこともあって、歴代、一貫して高い評価を得てきた。しかし、淡雅な詩風もあって、他の唐詩人ほどには詳細に、また系統的に研究が積み重ねられてきたわけではなかった。そこで、代表作とされ、後世の詩人たちから追慕されることの多かった『輞川集』の作品群についても検討の余地を多く残したまま、今日に至っているのが現状である。申請者は、この点に注目して、王維の生前にはほとんど注目を集めなかった『輞川集』がどのような経緯で代表作として定着するようになったのか、またその現象の背後にどのような文学史上の意義があるのかを明らかにしようとした。</p> <p>本論文は、「序章」、「第一章、王維の詩と園林」、「第二章、輞川荘と詩」、「第三章、詩と絵画」「第四章、『輞川集』の評価」、及び「結語」ならなる。</p> <p>まず「序章」では、この論文での研究対象を明確に規定し、それに対する従来の研究成果とその問題点を整理するなどして、本論への導入としており、研究論文としてあるべき極めて整然とした構成をもって始めている。</p> <p>第一章の「王維の詩と園林」では、『輞川集』における作品群と園林の関係性を考察する前提として、輞川荘以外で作られた考えられる王維の詩における園林の表現を検討の俎上に上げる。前半では「終南別業」詩における「終南別業」が「輞川荘」と同一か否かという問題を取り上げ、当時の王維の状況を文献に残されている記事や他の王維の長安から見た山々の描写の検討を通して、それらが別のものであるという結論を導き出した。この間の検証はかなり入り組んでいるが、論者の主張は明確である。また、「待儲光羲不至」の詩を介して、初盛唐期の園林における詩人たちの交遊を考え、そこでの応答による「連作組詩」の存在を取り上げ、『輞川集』を検討する上での重要な材料を提示している。</p> <p>第二章の「輞川荘と詩」では、まず輞川荘で作られた作品で、『輞川集』には収められなかった詩（「輞川閑居」「積雨輞川荘作」「贈裴十迪」など）に描かれる田園の風景描写を取り上げ、その語彙を検討して、これらにおける田園風景の描写が輞川の地が出仕の場である長安と隔絶された精神的な充足を得る隠逸の場所であることを示すものとの認識を述べる。さらに、これを踏まえて、『輞川集』における王維の風景認識の考察に踏み込み、とくに詩題ともなっている「游止」の場所の典故を手がかりにして、『輞川集』において表現されている世界は『文選』を主とする古典に表現された長江流域以南の世界を再現したもの」と捉え、それは長安の近郊で見ることのできない「架空の世界」の構築を試みたものであると結論する。この問題については、従来は「極楽浄土の世界」「神仙的世界」「桃源郷の世界」などとの解釈があったが、これとは違った新しい見解を提示したことになる。ただ、そうであるとすると、江南世界へのあこがれはこの時期の詩人（たとえば白居易）たちが多かれ少なかれ持っていたものであることから、それらとの違いがどのあたりにあったのかの言及も望まれるところであった。</p> <p>第三章の「詩と絵画」においては、後世、「詩中に画有り」「画中に詩有り」と称せられ、実際に詩人にして画の名手でもあった王維の詩を手がかりに唐代における「詩人」と「画家」の関係について</p>	

考察し、王維と杜甫の詩においてのみ画家に言及する例のあることを指摘する。とくに王維が詩人と画家とを同列において評価していたことを指摘し、そのことが北宋後期以降、士大夫が作詩とともに画を描くことを一つの教養とするに至る気風の先駆となったこと、また『輞川集』の「再発見」の評価とも繋がっていることをいう。

第四章の『輞川集』の評価は、本論文のもっとも重要な部分であり、唐宋の間における王維詩の受容史、評価史の変遷と、その文学史上の意義について考察している。王維の没後、弟の王縉が『王維集』を代宗に献上した上奏文とそれへの答勅を検討して、前者が王維の性格や日常について記し、詩文について言及がないのと対照的に、後者には全篇にわたって代宗の王維の詩文に対する論評と個人的な愛好とが記されることを指摘し、その背景として朝廷の側に安史の乱以後の長安における文壇の空白を埋めるための文学の規範を示す狙いがあったと結論する。従来は王維の側に唐朝の権威付けの面からのみ考えられることが多かったが、これを唐朝の側にもその必要性があったという指摘は斬新である。またこの当時、勅命による別集の献上や編纂は極めて稀であった事実を洗い出し、しかも王維が安祿山からの官位（いわゆる「偽官」）を受けた身であったにも関わらず、これを認めたことに触れるのも重要な指摘である。ただこれを同時代の駱賓王などの同様の詩人や後世の「弑臣」の事例と比較すれば、この事実の文学史上の重みがより一層鮮明になったのではなかったかと思われる。

この章の後段には、詩歌集『輞川集』と絵画「輞川図」の唐宋間における評価の変遷を取り上げ、本論文の総まとめとしている。ここでは、王維と輞川荘の関係については夙に周知されているが、唐代の文献には詩集『輞川集』について言及するものがないという事実の指摘があり、宋代に入ると輞川荘に関係のない園林においても「輞川図」が想起されるほどに注目を集め、その「図」に関する詩歌が作られ、詩と画に優れていたことへの共感があったことを指摘する。さらに北宋後期になると、蘇軾とその仲間の文人たちが「輞川図」から『輞川集』という詩集を連想し、その詩集の特徴である「連作組詩」を典型と意識して同様の創作が盛んに行われるようになる。これを論者は、王維の没後とりたてて評価されることのなかった『輞川集』の「再発見」と呼ぶ。このことを契機として、南宋期に入ると、『輞川集』に描かれる輞川は隠逸の風景を代表するものとして共通の認識が生まれ、その結果、「輞川図」を介せず、直接に『輞川集』への言及が一般化し、評価の定着に繋がったと論じる。この指摘は十分に首肯できるが、当時の文人たちの文学観とも密接に関わる問題であるので、背景の事情に更に踏み込んで考察すればおれば、より豊かで厚みのある論考になったであろうと思われる。

本論文は、王維詩における絵画と詩との関係を、その受容史、評価史の中で、『輞川集』という単独の詩集に基づいて具体的に指摘し、かつ詩歌誕生の地としての「園林」という観点を立てて論ずることで、これまでの王維研究に新しい展開をもたらしたものであり、本学において博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。

公開審査会開催日	2013年 6 月 8 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学・教授		稲畑 耕一郎
審査委員	早稲田大学・教授	博士(文学)早稲田大学	内山 精也
審査委員	専修大学・教授	博士(文学)早稲田大学	松原 朗
審査委員			
審査委員			